



Title	Short-term parent training for parents of preterm-birth children: A pilot two-arm, non-randomized trial
Author(s)	松井, 美優
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105559
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (松 井 美 優)

論文題名

Short-term parent training for parents of preterm-birth children: A pilot two-arm, non-randomized trial

(早産児の親に対する短期ペアレントトレーニング：パイロット二群非ランダム化試験)

論文内容の要旨

早産児は神経発達上の困難を抱えることが多く、ADHD(注意欠如・多動症)やASD(自閉スペクトラム症)などの神経発達症のハイリスクであることが知られている。また早産児の親については、NICU退院後も長期にわたり育児において高いストレスを感じやすく、親子関係や子どもの発達に影響を及ぼす可能性がある。ペアレントトレーニング(Parent Training)は、養育スキルの獲得により、子どもの発達促進と親の育児ストレスの軽減に有効とされている。

本研究では早産児の親に対するペアレントトレーニングが、親のストレスおよび子どもの適応行動に与える影響を検討した。対象は、在胎30～36週、1000～2500gで出生した2～3歳の子どもの親とし、介入群と待機リストによる対照群の2群の非ランダム化比較試験を実施した。サンプルサイズは先行研究を参考に合計40名と見積もり、介入群、対照群の順にリクルートを行った。介入には、早産児の特性理解や、応用行動分析(Applied Behavior Analysis: ABA)の原則を含む、短期(全4回)のペアレントトレーニングプログラムを実施した。主要アウトカムは、介入後時点におけるParenting Stress Index (PSI、育児ストレスインデックス)を用いて評価した親の養育ストレスとした。また、副次評価項目として、親のPSI下位尺度および育児自信度(Confidence Degree Questionnaire、CDQ)、子どものChild Behavior Checklist(CBCL)、Social Responsiveness Scale-2(SRS-2)、Vineland Adaptive Behavior Scales, Second Edition(Vineland-II)を評価した。分析は、介入前時点の評価と子どもの性別・月齢・出生体重を共変量として含めた共分散分析によって検討した。研究期間中にCOVID-19の感染拡大に伴う行動制限が行われ、一部計画の修正を行う必要があった。

合計31名の母親とその子どもが本研究に参加し、22名が介入群、9名が対照群に割り当てられた。対照群については、COVID-19の感染拡大に伴う行動制限によりリクルートを中断されることとなった。統計解析の結果、主要評価項目であるPSIの合計スコアにおいて、介入群と対照群の群間の統計学的な有意差は認められなかった。また副次アウトカムである子どもの行動や適応機能においても有意な改善は認められなかった。

本研究結果は、早産児の親に対するペアレントトレーニングの有効性を示す結果は得られなかった。この結果については、COVID-19に関連する制限により参加者募集が中断され、研究の統計的検出力が限られていたこと、またランダム化されていなかったことなどが要因として挙げられ、結果の解釈には慎重を要すると考える。しかし、追加的解析において、親の育児自信度や子どものコミュニケーション問題の改善の傾向が認められたことから、NICU退院後の心理社会的支援の選択肢としての潜在的な可能性を示唆している。今後は、介入のニーズや時期および方法の検討を含め、さらなる検証が必要である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (松 井 美 優)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	清水 栄司
	副 査	教授	下野 九理子
	副 査	教授	荒木 友希子

論文審査の結果の要旨

早産児は神経発達上の困難を抱えることが多く、ADHD(注意欠如・多動症)やASD(自閉スペクトラム症)などの神経発達症のハイリスクであることが知られている。また早産児の親については、NICU退院後も長期にわたり育児において高いストレスを感じやすく、親子関係や子どもの発達に影響を及ぼす可能性がある。ペアレントトレーニング(PT)は、養育スキルの獲得により、子どもの発達促進と親の育児ストレスの軽減が有効とされている。

そのため、本研究では早産児の親に対するPTが、親のストレスおよび子どもの適応行動に与える影響を検討した。対象は、在胎30～36週、1000～2500gで出生した2～3歳の子どもの親とし、介入群と待機リストによる対照群の2群の非ランダム化比較試験を実施した。介入には、早産児の特性理解や、応用行動分析(Applied Behavior Analysis :ABA)の原則を含む、短期(全4回)のPTプログラムを実施した。主要アウトカムは、Parenting Stress Index (PSI、養育ストレス指数)を用いて評価した親のストレスとした。

合計31名の母親とその子どもが本研究に参加し、22名が介入群、9名が対照群に割り当てられた。統計解析の結果、主要評価項目であるPSIの合計スコアにおいて、介入群と対照群の群間の統計学的な有意差は認められなかった。また副次アウトカムである子どもの行動や適応機能においても有意な改善は認められなかった。

本研究結果は、早産児の親に対するペアレントトレーニングの有効性を明らかにできなかった。これについては、COVID-19に関連する制限により参加者募集が中断され研究の統計的検出力が限られていたこと、またランダム化されていなかったことなどが要因として挙げられ、結果の解釈には慎重を要すると考える。しかし、追加的解析により介入の前後比較において、親の育児自信度や子どものコミュニケーション問題の改善の傾向が認められたことから、NICU退院後の心理社会的支援の選択肢としての潜在的な可能性を示唆している。今後は、介入のニーズや時期および方法の検討を含め、さらなる検証が必要である。本論文により発表された研究は、早産児の親に対するペアレントトレーニングの心理社会的支援の可能性を示した価値ある業績と評価された。以上から、本研究の成果は、博士(小児発達学)の学位授与に値すると判断した。